# 活動報告（2013.2～2014.1）

## ⑴　所員会議

第１回　2013年５月９日㈭

議　題

１．2012年度事業報告および決算報告について

２．2013年度事業計画および予算について

３．綜合郷土研究所構成員の加入・継続申請について

４．運営委員の役割分担について

５．現地見学会について

６．郷土研の移転について

第２回　2013年６月20日㈭

議　題

１．郷土研の移転について

２．展示について

３．平成25年度環境研究総合維持費〈環境省競争的研究資金〉
「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法の開発（研究代表者：柳哲雄教授（九州大）」の受託について

第３回　2013年７月４日㈭

議　題

１．紀要の発行について

２．郷土研の移転について

３．史資料または図書の購入申請について

## ⑵　運営委員会

2012年度　第９回　2013年２月14日㈭

2013年度　第１回　2013年４月25日㈭

議　題

１．2012年度事業報告および決算報告について

２．2013年度事業計画および予算について

３．綜合郷土研究所所員・非常勤所員・研究員等について

４．所員総会の日程について

５．現地見学会について

６．郷土研の移転について

７．公開講演会について

８．東海地方の海里山の食文化研究会主催第２回シンポジウムについて

第２回　2013年７月25日㈭

議　題

１．移転について

２．紀要59輯の発行について

３．シンポジウムについて

４．図書について

５．新聞記事について

６．文書整理について

第３回　2013年９月26日㈭

議　題

１．第３回シンポジウムについて

２．講演会について

３．考古遺物の整理作業報告会について

第４回　2013年10月31日㈭

議　題

１．第３回シンポジウムについて

２．考古遺物の整理作業報告会について

３．2014年度ブックレット執筆希望者募集について

４．2014年度新規事業申請について

５．図書購入申請について

第５回　2013年11月22日㈮

議　題

１．第３回シンポジウムについて

２．諸活動（研究業績）の提出について

３．2013年度図書後期購入希望リストについて

４．2014年度予算申請について

５．2014年度ブックレット執筆希望者について

第６回　2014年１月23日㈭

議　題

１．役員改選（所長及び運営委員）について

２．非常勤所員及び研究員等の継続確認につ

いて
3．2013年度退職に伴う非常勤所員への案内について
4．シンポジウム開催について
5．講演会開催について
6．所員加入について

### ⑶　公開シンポジウム

第１回
日　時　2013年９月22日(日)
　　10時50分～17時20分
場　所　愛知大学豊橋校舎　記念会館３階
テーマ　海里山の儀礼食をめぐって

（講演者）
・基調講演
「海里山の神饌」
　岩井宏實
　（国立歴史民俗博物館名誉教授）
・報告
「山（焼畑）の儀礼食から」
　小川直之
　（國學院大學折口博士記念古代研究所）
「里の儀礼食（餅）から」
　安室　知
　（神奈川大学日本常民文化研究所）
「海の儀礼食（鯛）から」
　印南敏秀（愛知大学綜合郷土研究所）
「南方世界の儀礼食（芋）から」
　後藤　明（南山大学人類学研究所）
（総合討論）
　コーディネーター
　佐野賢治
　　（神奈川大学日本常民文化研究所）
　小島孝夫（成城大学民俗学研究所）

〔以下ポスター案内文より抜粋〕
　愛知大学綜合郷土研究所では、2012年度から「東海地方の海里山の食文化研究」に取り組んでいます。昨年は第１回シンポジウム「食文化研究の現状と課題」を開催し、考古・歴史・民俗学から、これまでの食文化研究の歴史を振り返り、今後への課題について議論しました。
　2013年度の第２回シンポジウムは「海里山の儀礼食をめぐって」というテーマのもと、民俗学から海里山の儀礼食について報告し、議論します。変化しにくい儀礼食から日本の食文化の特色や日本文化の原点について考えたいと思います。また、昨年のシンポジウムで話題になった世界無形文化遺産に申請する「和食とはなにか」といった、旬の話題も考えたいと思います。
　なお、今回は関東・中部の私立大学の５研究所連携シンポジウムとして開催いたします。

### ⑷　公開講演会

東海地方の海里山の食文化研究会公開講演会

日　時　2013年３月30日㈯
　　13時30分～15時30分

場　所　豊橋校舎　研究館第１会議室

テーマ　志摩の海の食文化

発表者　石原義剛（海の博物館館長）

志摩国は古くから「御饌つ国」と呼ばれたように、海からの食材を、神様はじめ旅人から地元の人にまで提供しつづけて来た海辺の地にある。その食材は四季によって大きな変化がある多様な魚介藻類からなっている。それを採捕してきたのが「あま」であった。とられた漁獲物は「さっぱ」船で、一大消費地・山田（伊勢市）や名古屋に運ばれて、はじめて調理された。しかし、今は漁獲から調理そして食べるまで、すべてが変化した。

2013年度　第１回

日　時　2013年７月６日㈯
　　13時30分～15時30分

場　所　豊橋校舎　研究館第１会議室

テーマ　藩札―江戸時代の紙幣と生活―

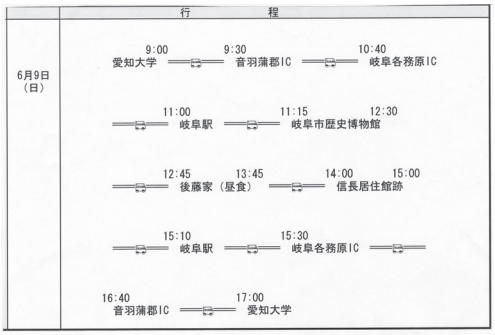
発表者　橘　敏夫（綜合郷土研究所研究員）

今日の日本人は、紙幣中心の複雑な金融システムの中で生活している。その先駆けとな

った江戸時代の紙幣が「藩札」と呼ばれるものだ。藩札は金銀貨をはじめ素材が実質的な価値をになう江戸期の固い貨幣制度を補完すべく、生活上の必要とともに社会に広まっていった。本書は、その登場から明治政府の新貨幣制度により役割を終えるまでの藩札事情を、三河吉田藩を中心に紹介する興味深い研究成果である。

### ⑸　現地見学会

日　時　2013年６月９日(日)
テーマ　織田信長を探る！
見学地　織田信長公居館跡
　　岐阜市歴史博物館



| | 行　程 |
|---|---|
| 6月9日（日） | 9:00 愛知大学 ― 9:30 音羽蒲郡IC ― 10:40 岐阜各務原IC |
| | 11:00 岐阜駅 ― 11:15 岐阜市歴史博物館 12:30 |
| | 12:45 後藤家（昼食） 13:45 ― 14:00 信長居住館跡 15:00 |
| | 15:10 岐阜駅 ― 15:30 岐阜各務原IC ― |
| | 16:40 音羽蒲郡IC ― 17:00 愛知大学 |

### ⑹　考古成果報告会

日　時　2013年11月16日(土)
　　14時～16時
場　所　豊橋校舎　７号館１階712教室
テーマ　愛大発掘メモリーズ
発表者
　講演　第１部
　　岩野見司（東海学園大学名誉教授）
　　・東三河の考古学研究史―愛知大学が発掘調査を行なっていた頃―
　報告　第２部
　　楽原将人（綜合郷土研究所研究員）
　　・愛知大学が調査した遺跡

—愛大所蔵資料の整理から—
綜合郷土研究所考古資料整理スタッフ
・考古資料の解説（ギャラリートーク）

### ⑺　シンポジウム記念展示

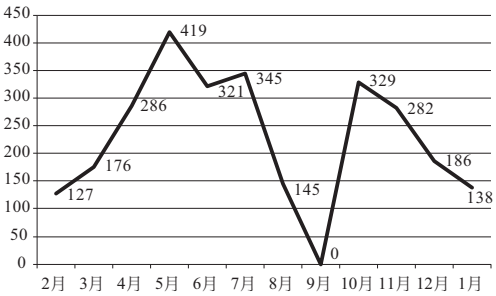
「相撲と食—相撲をめぐる食文化の世界—」
会　場　愛知大学記念館
期　間　9月21日(土)～10月5日(土)
（10時～16時・日・月休館／22日は開館）
後　援　公益財団法人「味の素食の文化センター」

### ⑻　刊行物

・愛知大学綜合郷土研究所紀要　第58輯
・愛知大学総合郷土研究所ブックレット22
『藩札—江戸時代の紙幣と生活—』

### ⑻　月別来館者数推移

（2013年2月～2014年1月調べ）



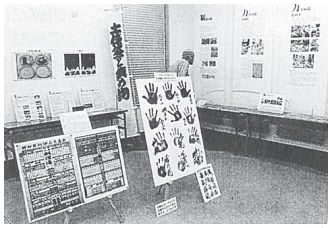

※9月は移転の為休館

## 相撲を通して食文化知って

### 愛大記念館で展示

相撲を通して食文化を学ぶ展示会「相撲と食」が豊橋市の愛知大記念館で開かれている＝写真。五日まで。日曜、月曜は休み。無料。

九月二十二日にあった愛大綜合郷土研究所主催のシンポジウム「海里山の儀礼食をめぐって」の関連展示。味の素食の文化センター（東京）が協力し呼び出しのいすなどを展示している。



垂れ幕やパネルで、大相撲の鳴戸部屋に取材したちゃんこの調理や食事の様子、土俵に納める塩や米、昆布などを写真入りで紹介。江戸時代の相撲茶屋が桟敷席に団子を届ける様子が分かる浮世絵や力水のひしゃく、大の土俵を再現し、愛媛県今治市の「一人角力」など全国の神事相撲も映像で紹介している。

床にはカーペットで直径四・五㍍の実物

2013.10.2
『中日新聞』朝刊

## 22日に海里山の食文化研究シンポ

### 愛大綜合郷土研

愛知大学綜合郷土研究所は、22日午前10時50分～午後5時20分まで、同大学豊橋校舎記念会館3階で、第2回「東海地方の海里山の食文化研究」シンポジウムを開く。予約不要で入場無料。誰でも参加できる。

今回のテーマは「海里山の儀礼食をめぐって」。基調講演は、国立歴史民俗博物館名誉教授の岩井宏實氏による「海里山の神饌」。変化しにくい儀礼食から、日本の食文化の特色や日本文化の原点について考える。また民俗学から海里山の儀礼食について報告し、議論する。

問い合わせは、同研究所＝電話0532（47）4160＝へ。（森美香）

2013.9.8
『東日新聞』

## 「藩札」の変遷を詳細に

### 愛大綜合郷土研がブックレット発刊

### 三河吉田藩中心に研究成果紹介

愛知大学綜合郷土研究所（豊橋市町畑町、印南敏秀所長）が、研究成果を発表するブックレットの第22号「藩札～江戸時代の紙幣と生活」を、あるむ（名古屋市）から発刊した。著者は同研究所員の橋敏夫氏。江戸時代の紙幣である藩札が登場し、明治政府の新貨幣制度により役割を終えるまでの経緯など、三河吉田藩を中心に紹介している。

表紙に吉田藩札の実物写真を載せた、愛知大学綜合郷土研究所ブックレット「藩札」

藩札は、金銀貨はじめ素材が実質価値になった江戸期の貨幣制度を補完するため、生活上の必要とともに全国各藩に広まった。藩内のみ期限付きで通用する〝元祖紙幣〟で、銭札、米札、宿場札などがあった。吉田藩（明治2年に豊橋藩と改称）でも銭貨不足を受け、幕末の文久元年（1861）暮れから、まず銭札2種類を発行。明治2（1869）年10月に政府が藩札の新規製造を禁止するまで、さまざまな種類の藩札発行が続けられていく。

ブックレットでは、実際に使われた吉田藩札（日銀金融研究所貨幣博物館所蔵）の写真もふんだんに掲載。橋氏は同著書で「三河諸藩の藩札研究が不十分ななか、大河内家（元吉田藩主）文書に含まれる明治初年の藩政資料が閲覧でき、掲載を許可された。吉田藩札の通用制度がかなり明らかになった」と記している。

A5判・80㌻、定価800円。豊川堂などで販売している。問い合わせは同研究所（0532・47・4160）へ。（藤田彰彦）

2013.4.22
『東愛知新聞』

### ⑼ 研究所移転について

綜合郷土研究所は、豊橋校舎研究館２階（北側）に2013年10月１日移転した。

豊橋校舎綜合郷土研究所は、研究所員だけなく学生、外部の研究者の利用も多い。研究所の建物は、旧陸軍15師団の将校クラブとして使用されていた明治末期の木造建築物である。1951年綜合郷土研究所が設立され、60年余り使用されてきたが、築100年を過ぎ、耐火・耐震上危険度が高く、2011年12月15日の郷土研所員会議において、今後の研究活動も含め施設問題について検討し、移転について要望をしてきた。

**移転の基本的方向性**

豊橋校舎の研究所移転については、豊橋校舎施設委員会（2012年12月14日）及び常任理事会（2013年１月21日）において審議した結果、以下の通り基本的方向性を確認したとして2013年３月４日付学長名で以下の⑴～⑶の基本的方向性が示された。⑴綜合郷土研究所及び中部地方産業研究所は研究館２階へ移転する。⑵移転後の研究所の建物施設は、綜合郷土研究所及び中部地方産業研究所の所管から外し、大学として管理を行う。⑶⑴との関連から、研究館２階の三遠南信地域連携センター及び地域政策学部地域政策学センターは５号館に移転する。今後の研究館２階及び５号館にかかる具体的な配置、スケジュール等について、豊橋校舎施設委員会委員長の下で各研究所・センターの間で協議・調整のうえ具体化を図る。

2013年３月７日学長召集により豊橋校舎の研究所移転について移転関係部署との会合がもたれ、今年度の夏休みを目途に移転することを確認した。

**移転経緯**

2013年４月25日に開催された郷土研運営委員会では、２研究所が研究館２階に2013年度中に移転することを承認した。綜合郷土研究所関係の平面図及び研究館２階の平面図を基に、今の郷土研に比べると移転先は約２分の１の面積になる。研究館２階のフロアーの使用にあたり、南側か北側かを先に決め、移転内容については、所員の意見を聞きながら決めていくことが話し合われた。意見としては、①中産研と足並みを揃えて移転する。②移転先の面積から廃棄物を選択・整理する必要がある。③移転先の環境整備が必要（間仕切りの撤去、遮光カーテンの設置、出入口のドアに透明ガラスを入れ、見通しをよくする等。）

５月９日郷土研所員会議において、郷土研と移転先の平面図を配布。移転先は現状の２分の１の面積になることから、レイアウトについては所員の意見を聞きながら決めていくことが話し合われた。

６月10日移転先及び移転の内容について、郷土研所員を対象にアンケート調査を実施。

６月20日郷土研所員会議において、アンケート調査の結果、移転先については研究館２階の北側を希望するものが多く、南側を希望する所員もいたため、中部地方産業研究所長と話し合い（ジャンケン）の上、決めることとした。また、研究館２階の床の強度が東西で異なり、東側が強いことが判明したため、書架については東側に設置することになった。移転内容については、移転先の限られた面積から全ての図書を移転することはできないため、研究館以外の場所の使用を要求することを前提として、特に学生サービスの低下にならないよう、利用率の高いものから段階的に移転することを決めた。

１）事務室は、ほぼ現状の面積とする。
２）閲覧室は、ほぼ現状の面積とする。
３）書庫は、まず郷土研の特色である東海５県（愛知・岐阜・三重・静岡・長野）を中心にした図書・雑誌と郷土研刊行物、資料類を設置する。
４）共同研究を推進するプロジェクト室については、「東海地方の海里山の食文化研究」

に加え、「新居地域の文化遺産を活かした地域活性化事業・花火祭り」の調査研究と報告書作成の協力依頼があり、さらに文化庁へも申請中で、通れば3年間の大きなプロジェクト事業となるため、プロジェクト室を使用することを確認した。

5）和書、古文書の移転希望先については、記念会館2階の使用を豊橋総務課に申請中であるが、本館など他の鉄筋建物使用についての可能性を探っていく。現状より1.5～2倍くらい広いスペースが必要。

6）考古遺物は現状の建物に残し、作業場所については今後検討していく。移転に伴う全体の意見としては、研究所並びに資料はできる限り、ひとつのところにまとめて保管することが重要。

6月21日、研究所の書籍移転費用が、豊橋総務課の予算枠に入っていないことが判明したため、豊橋総務課で業者見積りを再度取り直すことになり、並行して事務局では、研究館2階（北側）移転先の事務室・閲覧室・書庫及びプロジェクト室のレイアウト（案）を作り、移転対象書架の東海5県別の必要本数を計算して、図面化した。

7月3日､移転についての具体的な打合せを豊橋校舎施設委員長、豊橋総務課及び2研究所と行った。

7月4日の郷土研所員会議において、移転先は研究館2階の北側フロアーに決定。書庫の配置は、床の強度がある東側とし、東海5県の図書・雑誌や辞書等約2万冊余りの移転を決めた。研究館に移転出来ない部分については、今後移転を要求していくが、古文書の移転先については、7月3日の施設委員長との打合せで、4号館1階東南の角部屋に移転の提案が示されたが、古文書の移転は燻蒸とセットでないと移転しない旨の発言があり、現状のままとした。研究館への移転時期については、郷土研は9月中を予定した。

7月25日郷土研運営委員会では、移転スケジュールの大枠を決めた。具体的に移転図書・雑誌・辞書や書架の搬出・設置（案）が出された。また、移転に伴うアンケート調査結果では、第1回から3回の郷土研所員会議を踏まえて、移転全般について所長に一任することが決まった【資料①～④参照】。

7月上旬、移転に伴う具体案を作成し業者に提示し、見積りを依頼。

7月19日、見積りの結果をもとに豊橋総務課と今後のスケジュール等打合せを行った。

移転は、当初アルバイトの応援が得られる夏休み明けに集中して移転する計画であったが、全体的移転計画に併せることが合理的との判断もあり、また、図書館からバーコードリーダーを一斉休暇明けから借用できることになったため、急遽、移転図書・辞書等の受入原簿入力を前倒しで行った。これにより移転図書類の設置場所の表示は、郷土研（研究館）に区分けすることができた【資料⑤参照】。

書架・机・椅子やラックなど移転に伴う必要な備品は、豊橋総務課倉庫から探し出し、設置した。特に書架は、郷土研の歴史のなかで随時買い足され増設されてきたため、種類が異なり、そっくりそのままの状態では移転はできず､一部組み換えの必要性が出てきた。また、郷土研の図書や雑誌の配架は、東海5県別・市・町・村別の区分の特殊な配架のため、書架数や段数の蔵書を数えて一覧表にした。研究館の総面積から書庫、事務室、閲覧室及びプロジェクト室を割り出し配置した。

移転業務の主なスケジュール

⑴ 現状の郷土研配置図と移転先の配置図の作成

⑵ 移転図書・辞書の受入原簿入力
OPAシステムでの検索結果では所蔵情報(配架場所)は、郷土研(研究館)に表示される。

⑶ 先にプロジェクト室・事務室・閲覧室

を移転

⑷　移転図書・辞書等を配置表に従って段ボール詰めし、事務室に仮置

⑸　書架の解体

⑹　書架の搬出

⑺　書架の組立

⑻　移転図書・辞書等搬出

⑼　移転図書・辞書・雑誌類の配架

9月26日郷土研運営委員会において、移転先の状況と移転後の蔵書や資料等の取扱いの変更について報告【資料⑤～⑥参照】。

10月1日豊橋校舎研究館2階（北側）に予定通り移転。

図書の探し方については、従来通りです。郷土研独自の蔵書のAGMSN分類と配架方法及びOPACシステムでの検索については、資料⑧を参考にご利用ください【資料⑧参照】。

## おわりに

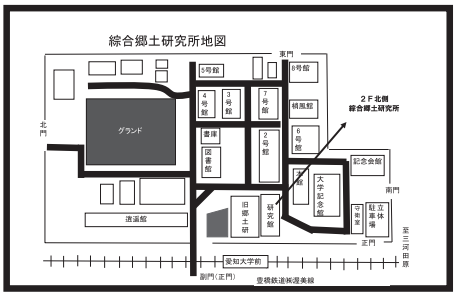
郷土研の移転作業は無事終了することができた。しかし、旧研究所建物には、東海5県以外の図書・雑誌、和本、古文書や考古遺物等が残ることになった。このことにより、旧研究所所蔵図書や雑誌の閲覧・貸出しの申込み締切りは原則として、当日の15時に変更することになった【資料⑦参照】。移転後も東海5県以外の図書・雑誌の利用は予想以上に多く、また古文書や和本の閲覧希望もあり、旧郷土研への出入りが続いている。災害時のリスクを避けるためにも、残された図書や史資料の移転が急務である。

夏季休暇中にもかかわらず、臨時職員（小津真由美、齋藤暢子、髙木秀和、花井昂大）のみなさんにご協力いただいた。

（文責　山口恵里子）

資料⑥

綜合郷土研究所案内図

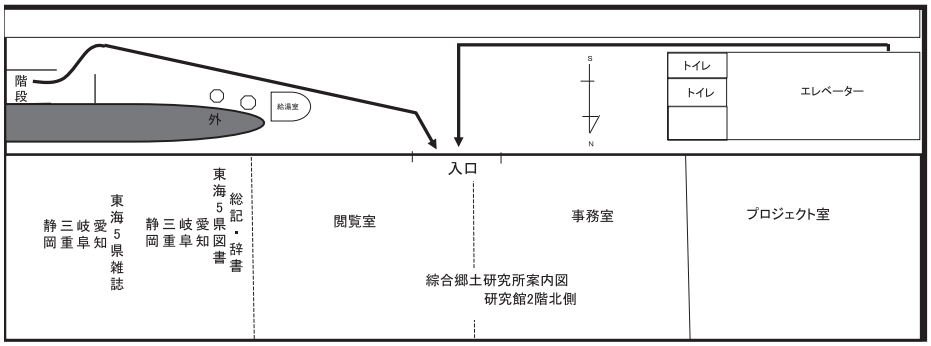



移転のお知らせ

綜合郷土研究所の事務室及び東海5県の
図書・雑誌と総記・辞典は10月1日より
研究館2階(北側)に移転しました。

綜合郷土研究所

綜合郷土研究所案内図



資料①

2013.7.4郷土研所員会議
2013.7.25郷土研運営委員会

## 郷土研の現状面積と移転に伴う必要面積（検討資料）

**移転先決定部分**

| 室名 | 現状面積（㎡） | 研究館2F北側（予定） | 必要面積（㎡） |
|---|---|---|---|
| 事務室 | 33.12 | 中心に設置 | 60 |
| 閲覧室 | 33.12 | | |
| 図書書庫※1 | 57.33 | 東側に設置（東海5県） | 80 |
| 雑誌書庫※1 | 34.78 | | |
| プロジェクト室　※2 | 17.22 | 西側に設置 | 40 |
| 合計面積 | 175.57 | | 180 |

**今後の移転部分**

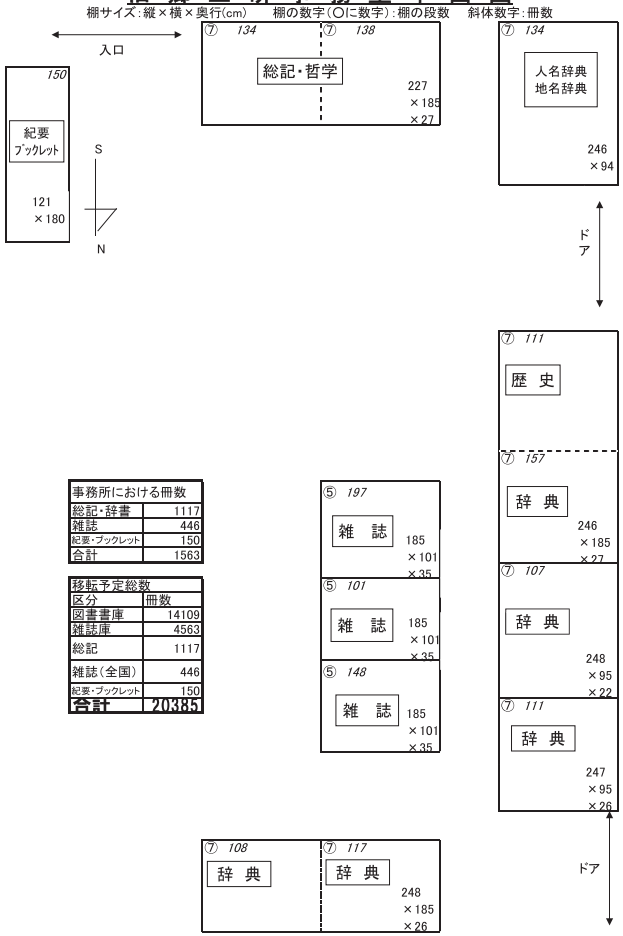
| 現状 | 面積（㎡） | （予定面積倍率等） | 面積（㎡） |
|---|---|---|---|
| 図書・雑誌書庫（90.45㎡の0.5倍）※1 | 46.06 | （東海5県以外） | 46.06 |
| 保管庫（埋蔵文化財・ゼンリン地図等） | 25.87 | 1.5 | 38.79 |
| 資料室（和装本・事務関係棚） | 13.25 | | 13.25 |
| 資料室（マイクロ・地図等） | 13.25 | | 13.25 |
| 古文書収納室 | 40.95 | 2.5 | 170.36 |
| 古文書収納室（記念館2階第4室） | 44.23 | | |
| 展示室（土器関係） | 57.33 | | 57.33 |
| 出版物倉庫（郷土研南・シャワー室） | 26.5 | | 26.5 |
| 新聞・雑誌書庫（第二研究棟） | 16.2 | 1.5 | 24.3 |
| 土器類倉庫（第二研究棟） | 16.2 | 1.5 | 24.3 |
| 印刷物倉庫（第二研究棟） | 20.25 | | 20.25 |
| 合計面積 | 320.09 | | 434.39 |

注）面積は小数点第3位以下四捨五入で表示、但し、研究館2階北側面積は全体から按分。
※1：重複部分
※2：プロジェクトは里海研究、食文化研究、新居地域民俗・伝統芸能調査研究事業が進行中。

資料②

## 旧郷土研事務室平面図

棚サイズ：縦×横×奥行(cm)　棚の数字（○に数字）：棚の段数　斜体数字：冊数



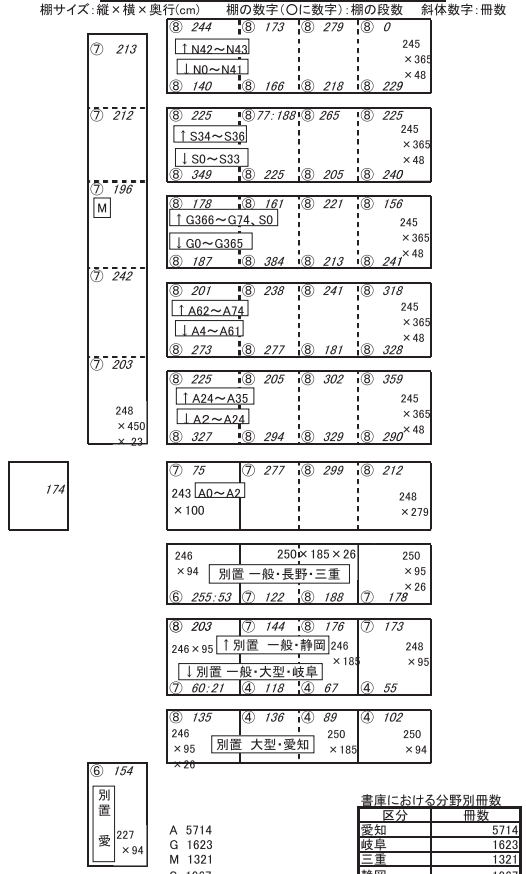

| 事務所における冊数 | |
|---|---|
| 総記・辞書 | 1117 |
| 雑誌 | 446 |
| 紀要・ブックレット | 150 |
| 合計 | 1563 |

| 移転予定総数 | |
|---|---|
| 区分 | 冊数 |
| 図書書庫 | 14109 |
| 雑誌庫 | 4563 |
| 総記 | 1117 |
| 雑誌（全国） | 446 |
| 紀要・ブックレット | 150 |
| **合計** | **20385** |

資料③

## 旧郷土研書庫平面図

棚サイズ:縦×横×奥行(cm)　棚の数字(○に数字):棚の段数　斜体数字:冊数




A 5714
G 1623
M 1321
S 1967
N 2037
X 466＋122＝588
別置一般 859
total :13128+981=14109

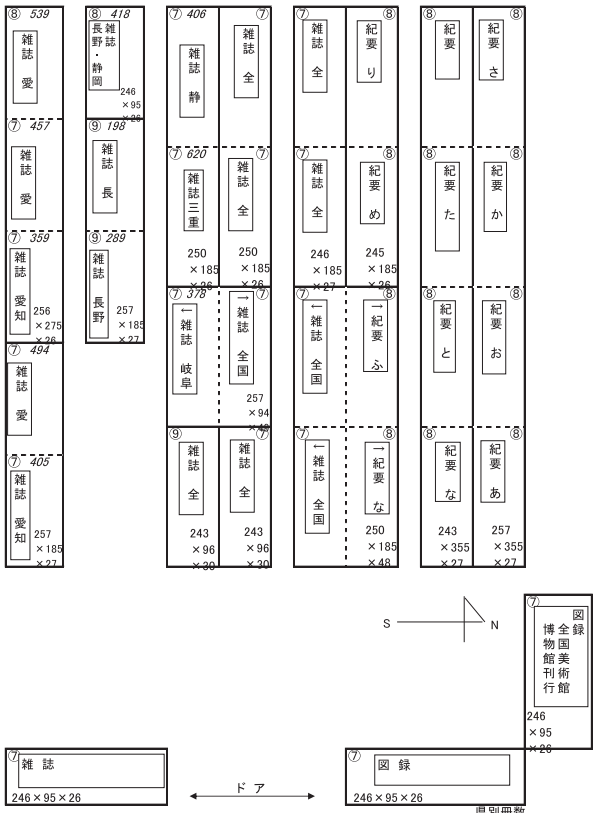
書庫における分野別冊数

| 区分 | 冊数 |
|---|---|
| 愛知 | 5714 |
| 岐阜 | 1623 |
| 三重 | 1321 |
| 静岡 | 1967 |
| 長野 | 2037 |
| 大型本 | 588 |
| 別置一般 | 859 |
| 合計 | 14109 |

資料④

## 旧郷土研雑誌庫平面図

棚サイズ:縦×横×奥行(cm)　棚の数字(数字に○):棚の段数　斜体数字:冊数




県別冊数

| 区分 | 冊数 |
|---|---|
| 愛知 | 2254 |
| 岐阜 | 378 |
| 三重 | 620 |
| 静岡 | 406 |
| 長野 | 905 |
| 計 | 4563 |

資料⑦

2013.9.26　郷土研運営委員会

## 旧郷土研配架図書貸出について

旧郷土研に配架されている図書の当日貸出の申し込み締め切りは、15：00です。

申請書に記入の上、開館時間内に受け取りをお願いします。

### 旧郷土研図書貸出申請書

申請日　　月　　日　（　）

氏　名

貸出希望日　　月　　日　（　）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 来館時間 | ① | 9：30～11：30 | | ※土曜開館時は①の時間のみです。 |
| | ② | 11：30～15：30 | | |
| | ③ | 15：30～17：00 | | |

注　）OPAC上と実在庫が合わない場合があります。

申し訳ありませんが、万が一在庫がない場合はその旨連絡させていただきます。

TEL（連絡のつく番号）：

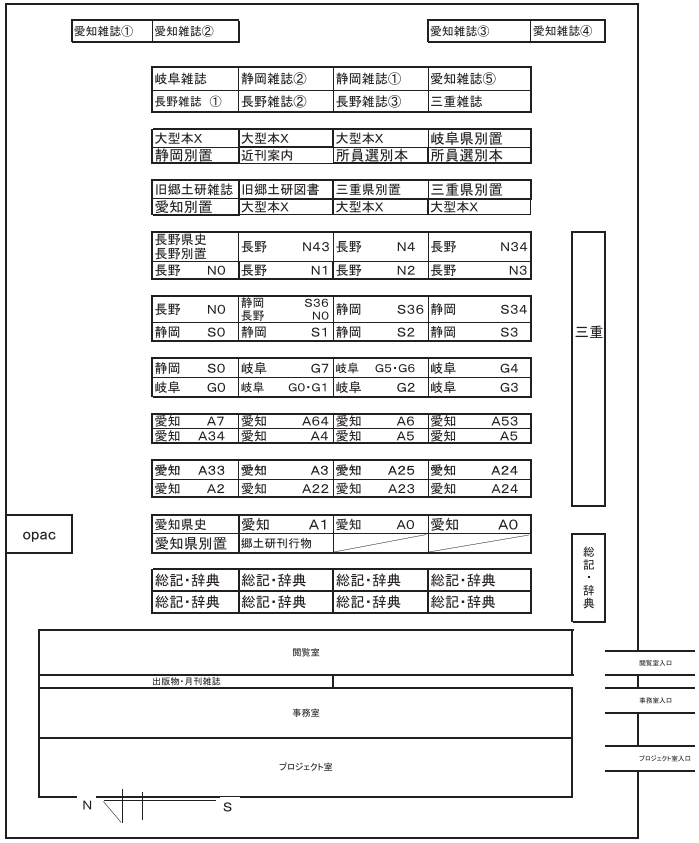
E－mail：

| 受付 | | 図書 | | 在庫不 | | 貸出 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|

（備考）

資料⑤

**新郷土研（研究館）配架図**



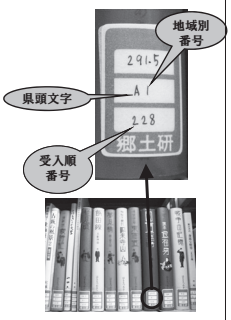
資料⑧

## 蔵書のAGMSN分類

郷土研独自の分類と配架方法

愛知県＝A
岐阜県＝G
三重県＝M
静岡県＝S
長野県＝N

東海五県の図書・雑誌は
県別市町村別に分類、
受入順に連番で配架されている

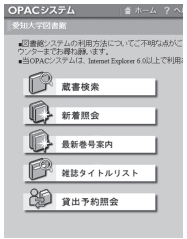



## 図書の探し方　1

【書名、著者名から探す】

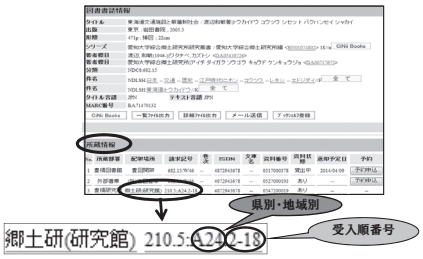
例『東海道交通施設と幕藩制社会』を探すには・・・

OPACで検索




## 図書の探し方　2

・OPAC検索結果の**所蔵情報**（配架場所・請求記号）に注目




## 図書の探し方　3

・書庫で請求記号をもとに本を探す。

郷土研(研究館) 210.5:A242-18

Aの24の2冊目、18巻を探す。

## 図書の探し方　4

【地域から探す】
書架側面の案内表示から、地域別のアプローチも可能。

例「豊川市」について調べたい。

案内表示から豊川市の書架を探し、
請求記号を確認。（豊川市＝A232）
背表紙の請求記号A232の図書を
探す。

書棚を眺めれば研究のヒントがわいてくるかも・・・

## 郷土研の利用方法

- **開館時間**
  平日　9:00～12:00　13:00～17:00
  ★講義期間・試験期間中は、19時まで開館
  土曜　9:00～12:30
- **図書の貸出**
  教員50冊以内・1カ年
  非常勤教員・院生30冊以内・2カ年
  学生10冊以内・15日
- **行事への参加**
  掲示を見て申込
- **刊行物の閲覧・購入**
  学内図書館と郷土研で閲覧可
  叢書、ブックレットは郷土研、書店で
  購入可

**新綜合郷土研究所・研究館２階北側**

豊橋校舎研究館

研究館２階北側

研究館２階・新郷土研事務室・閲覧室・書庫

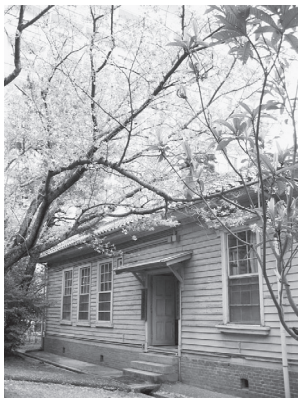
**旧綜合郷土研究所**

旧郷土研　建物外観

旧15師団の将校クラブとして使われていた。

現在は書庫（閉架）として使用。

書庫の図書を利用する場合、貸出申請書が必要。



旧郷土研事務室・閲覧室

### ⑽　資料整理作業報告

2013年度は２つの文書群の目録作成をおこなった。どちらも2011年度に古書店から購入したものである。作業は内藤路子（臨時職員）がおこなった。以下、内容を簡単に紹介する。

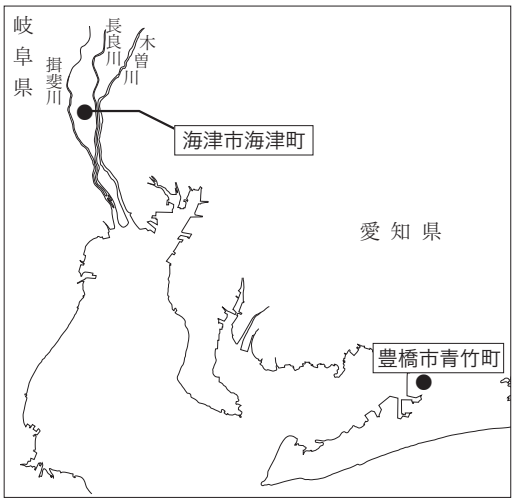
#### １．三河国渥美郡青竹新田榊原家文書

青竹新田（現、愛知県豊橋市青竹町）の榊原家旧蔵文書で、点数は863点。

青竹新田は前芝村の青木九郎次が開発した新田で、明和９年（1772）に検地をうけている。榊原家がここに移り住んだ時期は不明だが、「青竹新田・牧新田分入高皆記」（No. 21）によれば、榊原家は文化年間（1804〜1818）以降、青竹新田の組頭や庄屋代をつとめている。当主は代々清蔵を名乗った。

榊原家の人の名が最初に確認できるのは文化９年（1812）の手習本で、「榊原岩吉」と記されている。手習本と算術のテキストは30点ほどあり、岩吉、岩蔵、桂作、平太郎の名を確認できる。

本文書群は平太郎関係の史料が約９割を占めている。平太郎は安政３年（1856）に生まれ、青野村戸長、吉田方村収入役、吉田方村会議員、吉田方村長などをつとめた人物で、明治31年（1898）に吉田方村長を辞した後は、牟呂用水普通水利組合委員や吉田方漁業組合理事などをつとめた。晩年は豊橋別院に寄留して詰番をしている。非常に筆まめな人物で、明治９年（1876）から大正年間まで日記を残しており、職務上の必要事項の転記、書状・願書の控、農作業や海苔場の記録などがことこまかに記されている。




豊橋市青竹町・海津市海津町の位置

本文書群で最も年代の古い文書は慶長５年（1600）の「海方御運上訳牒」（No. 51）だが、これは、明治８年（1875）に国が打ち出した海面拝借制度に対し、牟呂村に面した海の利用権を主張する根拠として、当時青野村の用係および浦役人をつとめていた平太郎が入手したものと考えられる。これとは別に平太郎が作成した写があり、海面拝借願の控とともに綴られている（No. 52）。牟呂村に面した海の新田開発に反対する寛文７年（1667）の願書（No. 19）も同様の目的で入手したと考えられる。

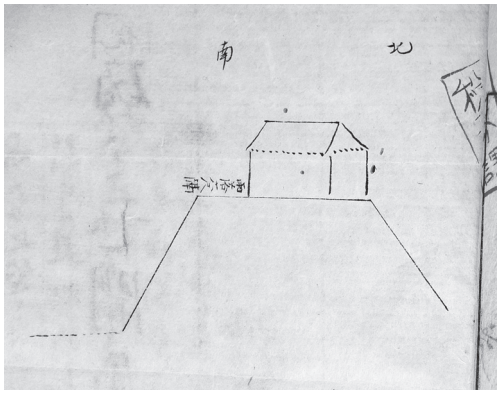
また、明和６年（1769）の青竹新田開発免許の写（No. 13）や明和９年（1772）の青竹新田検地帳写（No. 11）など、青竹新田の成立に関わる文書もあるが、これらは平太郎が青野村の村誌編輯のために収集したもので、その一部は村誌（No. 32）に載録されている。

#### ２．美濃国石津郡内記村伊藤家文書

幕末に内記村（現、岐阜県海津市海津町内記）の庄屋をつとめ、明治期には戸長・岐阜県会議員などの公職を歴任した伊藤又吉の家に伝来した文書で、点数は255点。

内記村は長良川と揖斐川にはさまれた高須輪中の中央部に位置する。村の西を大江川（西大江川）、東を東大江川が流れ、二つの川は村の南で合流している。海抜１メートルほどの平坦な低地で、かつては洪水の常襲地帯だった。

江戸時代を通じて幕府領で、村高は幕府の公式帳簿である元禄郷帳・天保郷帳でともに432石余である。村明細帳（No. 36、作成年不明）によれば、内記村の家数は18軒、村




**堤塘拝借願付図（部分）**

人の数は88人である。大江川を悪水排水路として利用しており、川幅の平均は50間（約90メートル）。堤防の一部は「中堤（なかてい）」として他の堤防とは区別されている。中提とはこの地域特有の用語で、現在の高須輪中が完成する以前に作られた潮除堤などをさしている。

幕末か明治初年の作成と考えられる絵図（No. 3）は周辺村々との位置関係や圦樋の場所の記載が詳しい。また、堤防に木が植えられていたり家が建ち並んでいたりする様子が描かれていて、村の景観をイメージしやすい。大江川の堤防の一部が他より太く描かれており、これは中堤をあらわしている。

本文書群は近世内記村の村方史料、又吉がつとめた様々な役職に関する史料、又吉とその後を継いだ綾治の時代の土地集積に関する史料、高須郵便局長をつとめた綾治の長男昇の給与辞令などからなっている。近世期の史料には、先述した村明細帳のほか、笠松代官所からの国役金などの受取書（No. 4〜No. 29）がある。

又吉がつとめた役職に関する史料には様々なものがあるが、内容的にまとまっているものはあまりない。その中で、堤防拝借願の控（No. 31、No. 39–10）が明治13年（1880）から大正期まで継続して残っている。伊藤家ほか4軒が岐阜県などに提出した、中堤上にある自宅の土地の拝借願の控で、図面が添付されており、堤防上に家が建っている様子がよくわかる。これらの書類の中には、近世期の文書の写しも1点ある。これによると、内記村では文政11年（1828）に洪水対策のため村を挙げて中堤へ移住することを地主に「懇願」したことがわかる（No. 39–9–8）。堤防に家などを建てることは内記村の近隣の村でもおこなわれているが、こうした土地利用がいつ頃からはじまったかを示唆する史料であると思われる。

なお当研究所では、本文書群とは別に、出所を同じくすると思われる文書約450点を収蔵しているので、あわせてご利用いただきたい。

（文責　内藤路子）

### ⑾　考古遺物整理作業報告

昨年度に引き続き、愛知大学にとって、文化財保護法に基づく報告の責務のある2つの遺跡「河原田遺跡」と「川田原古墳群」の資料整理を中心に行なった。また、本年度は資料整理成果報告会「愛大発掘メモリーズ」を行ない、岩野見司氏（東海学園大学名誉教授）のご講演を賜った。

なお、本年度より廣瀬憲雄所員がプロジェクトの一員として加わり、以下の体制となった。

神谷　智（所員）
廣瀬憲雄（所員）
玉井　力（非常勤所員）
井口喜晴（非常勤所員）
楽原将人（研究員）
森田亮子（臨時職員）
朝倉留美（臨時職員）

**河原田遺跡**　昨年度に引き続いて、土器棺とそれに付属する土器の接合・復元、実測・トレースなど報告書作成に必要な作業を中心に行なった。ここで強調したいのは、作業の過程で、これまで所在不明だった1号土器棺を、発見できたことである。1号土器棺は著しく細片化しており、接合・復元作業は困難を極めたが、これを成し遂げることができた。現地調査終了直後からおよそ半世紀もの間、行方不明となっていた1号土器棺を発見し復元できたことは、大きな収穫であった。これによって、昭和40年（1965年）の現地調査で土器棺と認定されたものについては、すべて接合・復元を終え、報告が可能となった。その成果は、楽原将人研究員によって、本誌に掲載の「河原田遺跡発掘調査の記録Ⅱ」としてまとめられている。今回これで重要資料である土器棺についての報告は、完了したことになる。

**川田原古墳群**　川田原15・16・22・23・24号墳のうち、15・16号墳の報告をまずは目標とし、該当する遺物の実測図のトレース、遺構の図面作成・トレース作業を行なった。

**資料整理成果報告会の開催**　本年度は途中経過ではあるが資料整理の成果を広く一般に公開する報告会「愛大発掘メモリーズ」を、11月16日㈯に712番教室を会場として開催した。郷土史愛好家、かつて発掘作業にあたっていた愛知大学の卒業生などを中心に105名の参加を得た。なかでも、歴史に興味を覚えはじめたという中学生の参加があったことは驚きであった。報告会の次第は以下のとおりである。

第一部講演
・「東三河の考古学研究史～愛知大学が発掘調査を行なっていた頃～」
　岩野見司氏
第二部報告
・「愛知大学が調査した遺跡～愛大所蔵資料の整理から～」
　楽原将人
・考古資料の解説
　玉井　力・森田亮子

報告会参加者の方から「次回の報告が楽しみ」「こんな遺物が愛大にあったとは知らなかった」「愛知大学の発掘の歴史をはじめて知った」などの感想をいただいた。これまでなかなか表に出ることがなかった愛知大学収蔵の考古遺物を、公開できるように整理していくことは、保管する愛知大学の責務であり、地域社会への貢献につながることだと再認識することができた。　（文責　森田亮子）

河原田遺跡１号土器棺接合の様子

河原田遺跡１号土器棺の復元後の状態

河原田遺跡10号土器棺接合の様子

河原田遺跡10号土器棺復元後の状態

資料整理成果報告会「愛大発掘メモリーズ」岩野見司氏講演会の様子

資料整理成果報告会「愛大発掘メモリーズ」
桒原将人研究員による報告の様子

資料整理成果報告会「愛大発掘メモリーズ」
復元した考古資料を解説している様子